

- 一 問一 a 〔交〕遊 b 〔中〕腹 c 夢〔中〕 d 〔談〕笑
 問二 1 イ 2 ウ 3 エ 4 カ 5 ク
 問三 A 孫のかえちゃんにひさしぶりに会えた。また、うすもも色の芍薬の花の中に入ってみ
 たいという夢がかなったから。
 B 自分の思いのままに遊んでいたばあばやじいじが自分をさそってくれなかった。また、小
 さくならうと頑張っているのに、ばあばが何をしているのか問いかけ、じゃまだったから。
 問四 人間は、ある日「とつぜん」生まれ、ある日「とつぜん」死ぬのだということ。
 問五 死んだばあばやじいじと再会した不思議な時間が終わり、現実にもどろうとする時に、か
 えちゃんの健やかな成長、幸せな人生を歩むことを願っているばあばとじいじの声だけが聞
 こえてきたから。
- 二 問一 a 茶化す b 足 c 提起 d 訳知り
 問二 主観にすぎないものを議論しても仕方がない
 問三 人間同士の間でも、たとえば「若葉の緑」の知覚が同じである保証はない。さらに、他の
 動物たちと人間との知覚はまったく違う。人間が知覚している現実が、現実なのかどうか疑
 わしい、つまり、世界はバーチャルに存在しているのだ。
 問四 敵の軍事施設だけをピンポイントで狙い、少しも標的を外すことのない、正確無比な多国
 籍軍のミサイル攻撃の映像が流された。軍事施設だけを破壊することが目的であり、一般の
 民間人に対する攻撃ではないという印象を、見る人々に与えることを意図した映像だ。
 問五 ネットの登場によって、すべての人類が情報を共有することができ、立場や国境による違
 いを越えて問題解決が可能な世界が来ると考えていること。
 問六 そもそも世界をバーチャルにしか理解できない脳が知覚する情報は初めからフェイクであ
 る。リアルタイムで真実を追求するインターネットが提供する情報や映像は、一見便利で情
 報が共有されるが、それはある立場から切り取られた現実の一部にすぎず、人々が生きてい
 る本当の現実ではありえない。また、インターネットの情報や映像は時間による検証や淘汰
 を経ることなく流布してしまう。さらにそれらの情報や映像は「嘘でもいいから、自分が見
 たいものを見たい」という人間の根本的な心理に基づいて発信され、消費されている。

解 説

一 出典は、大久保雨咲「五月の庭で」(『うっかりの玉』〈講談社〉所収)。

問二 2・3…一番めの(2)の直前に、「花がゆれて、ばあばもいっしょに」とあるので、ゆれている様子を表す言葉が適切です。ところが選択肢には、「ゆんら、ゆら」と「ゆらん、ゆらん」、ゆれている様子を表す言葉が二つ並んでいます。ここで注目しなければならないのは、「リズム」です。「うすもも色に／ふくらんだ」、「うーん、うーん、と、／うなります」、「いそがなくても、／だいじょうぶ」——この文章には、「七音・五音」のリズムがところどころに用いられています。詩などで七音・五音の順番で繰り返す形式を「七五調」と言い、優しい印象を与える効果があります。二番め、三番めの(2)に「ゆんら、ゆら」をあてはめてみると、「声をひそめて、／ゆんら、ゆら。／風にゆられて、／ゆんら、ゆら。」と七五調になります。次に(3)について見てみましょう。「芍薬の花」が「わら」う様子を想像してみると、やはりこれもゆれている様子を表す言葉が適切だと考えられます。「ゆらん、ゆらん」をあてはめてみると、「ゆらん、ゆらんと／わらいます」となり、これも「七音・五音」のリズムです。作者の表現のこだわりを理解しましょう。

問三 A…傍線部の直後に「かえちゃんを見ました」とあります。かえちゃんと永遠にお別れしてしまったはずのばあばは、再びかえちゃんとおうことができて、うれしかったのでしょう。「ちいさいばあばは、

楽しそうです。うすもも色の芍薬に、ずっと入ってみたかった、夢がかなった、と言って、笑っています」にも注目しましょう。 B…「いま、ちいさくなっているところ。じゃましないで」、「あそんでいたら～さそってくればよかったのに。なかまはずれなんて、あんまりです」という部分から考えます。

問四 「かえちゃんだって、とつぜん、やってきた」「かえちゃんも、まえの日までいなかったのに、つぎの日にはいたんだよ」という表現が、「(ばあばは) とつぜん、いなくなつて」「まえの日までいっしょにいたのに、つぎの日にはいなかった」という表現と対になっていることに注目しましょう。とつぜんいなくなったとは、〈とつぜん死んだ〉ということ。そのように考えると、とつぜんやってきたとは、〈とつぜん生まれた〉ということだと理解できます。さらに、「かえちゃんだって」とは、「かえちゃんも、ばあばと同様に」ということ。かえちゃんもとつぜん生まれたのだから、とつぜん死んだばあばと同じだと言っているのです。つまり、人間はとつぜん生まれ、とつぜん死ぬものなんだよ、とばあばは言いたいのです。

問五 (うんと、うーんと、ゆっくりおいで) も、傍線部直前の「そうそう。ゆっくり、ゆっくり……」も、ばあば・じいじの言った言葉です。ここで、「 」が()に変化していることに注目できたでしょうか。傍線部の前までは、リアリティを持って、はっきりと聞こえていたばあば・じいじの声が、傍線部では、()付きの言葉に変化している。声が遠ざかり、ぼんやりと聞こえているのです。このことから、()を付けることで、かえちゃんが、非現実の世界から遠ざかり、現実の世界に戻りつつある、ということを示しているのだと考えられます。次に、(うんと、うーんと、ゆっくりおいで)という言葉に込められた思いを考えます。「ゆっくりおいで」とは、「ばあば・じいじのいる世界(あの世)に、ゆっくりおいで」ということです。つまり、ばあば・じいじは、かえちゃんに、もっと成長して(「もっとおおきくならなくちゃ」)、うんと長生きしてほしい、人生をめいっぱい楽しんで欲しいと願っているのです。

二 出典は、押井守「ひとまず、信じない 情報氾濫時代の生き方」〈中央公論新社〉。

問二 空らんに入る内容は、「ローマ人は味と色については議論しない」ことの理由であり、前の部分にある内容だと推測できます。「僕の目に映る若葉の緑が、あなたの見ている緑と同じものであると、どうして言えるのだろうか」とは、自分と他人の知覚が同じとは限らない、知覚は人によって違う、ということ。よって、主観にすぎないもの(＝人によって異なる知覚)を議論しても仕方がないという内容が適切です。

問三 「その考え」とあるので、直前を見ると、それは「同じものを見ても、違うものを見ているのだとしたら、緑で覆われた美しい山並みという景色(＝人間が知覚している現実)も、実は現実なのかどうか疑わしくなってくる」という考えだとわかります。「同じものを見ても、違うものを見ている」ことの具体例として、自分と他人の「若葉の緑」の知覚が同じである保証はないこと、他の動物たちと人間との知覚はまったく違うことが挙げられているので、これも説明に加えます。

問四 「まるでテレビゲームのような映像」とは、「敵の軍事施設だけをピンポイントで狙い、少しも標的を外すことはないように見える正確無比な多国籍軍のミサイル攻撃の映像」のことです。そこには、「人々が死んでいくような悲惨な映像はなかった」のです。「自分たちが攻撃したのは敵の軍事施設だけで、民間人を殺すようなことはしていない」ように見せようという意図が、波線部から読み取れます。「まるでテレビゲームのような」というたとえの意味も考えてみましょう。

問五 「そんなことが本当に可能な世界が来ると考えていること」が「大いなるフェイク」であると述べています。「そんなこと」の指す内容、「ネットの登場によって、すべての人類が情報を共有することができるようになり、立場を越え、国境を越え、同じ土俵で問題に向き合うこと」を補ってまとめます。

問六 筆者は、人によって知覚している現実は異なるということを説明した上で、「リアルタイムで真実を追求するというインターネットの構造そのものが、フェイクニュースを生み出す仕組みになっている」と述べています。その理由について、直後で、インターネットの情報が、それぞれの立場から「自分たちの基準に应じて、彼らのストーリーに合う」ように切り出されたもの、あるいは、特別な意図がなくても「その人物が知れた情報でしかない」ものであるからだと説明しています。また、「リアルタイム」であるということは、その情報が時間による「淘汰」や「検証」もなく流布されるということも意味しています。さらに、「ネットの中にはニセ情報を作るだけの十分なインセンティブが働いており～それは、『嘘でもいいから、自分が見たいものが見たい』という人間の根本的な心理に基づいて発信される」のです。